

2019年11月05日

最近、意識的に無本で謡うことを心掛けるようになりました。その動機や経緯については追って記すことにしますが、取りあえず自分が心得ていることを整理してみると次の通りとなります。

#### 1. 反復して覚える

兎に角、ひたすら覚えること。そのために、身近なところに覚える対象を置いておくこと。会友の一人は、覚える対象を家の各所に張り出しておくと言いましたが、私は、覚えなくてはならない謡のコピーをポケットやカバンに忍ばせておいて思い出した都度これを取り出して眺めています。

#### 2. イメージで覚える

つまり、謡本とか形付本の活字のイメージを記憶することです。将棋とか囲碁の名人は、盤上の局面をそのままイメージで覚えて、これを再現できると言いますが、これに似ているかも知れません。

私の場合、これが比較的有効なのは、語句の最後、即ち「ヤオハ」とか「当たりヤ」のような間、それと詞章の最後部の「中廻し」とか中廻しの後の「スエル」など。

#### 3. 唇で覚える

暗記したと思っても、実際に声を出して謡ってみると意外や意外、詞章を思い出せないで絶句することがままあります。

つまり、頭で覚えるのと、口に出して覚えるのとでは、頭脳の記憶領域が異なるのではないか。

声を出さずに、口を使って謡ってみることを試みていますが、結果は良いようです。

#### 4. 意味と情景を思い浮かべながら覚える

暗記する対象の詞章を解釈し、理解、把握すると覚えやすくなります。

「かけ詞」がそのよい例ですが、連想によって、或いは、詞と言葉のつながりを連想して、それを意味の連鎖として捉えることで、記憶をし易くすることが出来るよ

うに思われます。

#### 5. 舞の形をイメージしながら覚える

仕舞の地謡に限られるが、仕舞の形と謡の詞章を結びつける。

抽象的な形である差込みや開であっても、必ずと言ってよいほど、詞章との関連性があるので、舞の形をイメージしながら詞章を覚える。例えば、「角トリ」はこの言葉、

「雲の扇」はこの詞章、といった具合です。

5原則は以上ですが、これらは、あくまでも私自身の独断に基づく法則で、普遍的なものではないことをお断りしておきます。

2019年11月18日

同好会などで、謡を無本で謡うことについては、①アマチュアの会では無本での謡は考えなくてよいとする主張と、②アマチュアであっても無本で謡うことが技量上達のためになるので積極的に取り入れるべきだとする二つの相反する考え方があります。

私は、かねてから①の見本主義で通してきましたが、これは、自分自身が多忙で謡を覚える時間がないという言い訳の気持ちが、今にして思うと、無意識にあったからではないかと思っています。

今でも多忙なことは変わりありませんが、数年前から考えが変わってきて、無本での謡は必要悪みたいな感じで受け入れることにしています。

年齢を重ねると共に物覚えが悪くなってきますが、暗記力を維持することで、多少はそれを遅らせることが出来るのではないかと、儚い期待と、謡の実力向上を目指すには、謡の暗記が役に立つことを、過去の経験で実証できるからです。

素謡を全て無本で謡うには、必要とするエネルギーが莫大なものとなるので、差し当たっては、仕舞の地謡を対象にして、以下の17曲を仲間と語らって実行しました。

11月8日（金）鎌倉文化祭～玉鬘、芭蕉・クセ、井筒、富士太鼓、女郎花

11月16日（土）菱水会～屋島、松虫・クセ、花筐・狂

11月17日（日）白謡会～高砂、経正・クセ、熊野・クセ、井筒、羽衣・キリ、天鼓  
班女・クセ、班女・舞アト、砧・後

この中で、一番苦労したのが、「芭蕉・クセ」でした。状況もイメージも浮かんできませんから、暗記の手掛かりが得られません。

アゲハ後の詞章は、このようなものです・・・

「・・・牡鹿の鳴く音は聞きながら。驚きあえぬ人心。思い、いるさの山はあれど。ただ月ひとり伴い、慣れぬる秋の風の音・・・」

鹿の鳴き声は秋の季節なのは分かるけれど、何故、驚きあえぬ人心なのか？ 山に一人で入るとして、それが慣れぬる風音とどう結びつくの？

このような厄介な詞章は、ひたすらに、五則の第一、ひたすら反復して覚えるしかなく、  
とは言え、老化が進みつつある頭脳にとって、これが一番の苦行であることは間違いない  
ところでありました。

本日、17曲を不本意ながら演じ終えましたが、望外の喜びは、ともに謡ってくれた仲間  
たちとのワンチーム意識が生まれたことでした。

2019年 11月 24日

「無本で謡うための5原則」を小欄(128)で投稿したところ、流友からメールにて、「自分は、覚える対象を先ず書き写して、それを部屋に貼っておきます。壁など貼り付けた謡の詞章の写しを常時見つめることで、頭脳に植え付ける」、のだとの告白がありました。

5則の2、「イメージで覚える」に該当することです。

確かに、書き物にして覚えるのは効果的で、そう言えば、私も、時々それをやります。但し、ごく部分的に、「中廻しを書いてその次がヤとかヤオハ」とか、「剛吟の最後がオで、その後がヤア」であるとか、語尾のその後の引きの長さを覚えるときです。

この場合、効果的なのは、毛筆とか筆ペンで書くこと。(謡と毛筆体との関係は稿を別にして、いつか書いてみたい！)

次に、小欄を書いているときに思い出したことですが、白謡会代表幹事のMさんは、ご自身でも何度か無本での素謡に挑戦されていますが、そのときには、暗記する謡本の語句を全て、頭に並べるように編集して、暗記のためのテキストを製作しています。

例で示すと、謡本「鶴亀」の1行目「それ青陽の春になれば。四季の」、2行目「節会の事始め。不老門にて日月」とありますが、これを次のように並べ代えるのです。

「それ青陽の春になれば・・・」

「四季の節会の事はじめ・・・」

「不老門にて日月の・・・」…と、編集します。

手間暇は、怖ろしい程かかりますが、これを実践した人たちは皆さん効果ありと認めています。